東京大学空手部

百年の歩み

東京大学運動会空手部・東京大学拳法会

目　次

東京大学運動会空手部創立 100 周年宣言.....2

東大空手部の創立と黎明期.....4

全国組織の結成と試合制度の確立.....10

東大空手部・拳法会の活動.....13

これからを担う若者.....16

＜参考資料＞

空手の淵源……19

日本本土への伝来と四大流派について……20

※表紙題字は、東京大学総長（第 31 代）藤井輝夫氏に揮毫いただきました。

東京大学運動会空手部創立 100 周年宣言

2025 年 12 月 6 日

東京大学運動会空手部・東京大学拳法会

100 年前、沖縄から伝わった新たな武術である空手に魅せられた先輩達が、東京大学に空手部を創立しました。徒手空拳で相手を倒し自らを護る技の研鑽と精神修養を旨とし、国家有用の人材たらんとしたのです。その後、太平洋戦争、戦後の武道禁止令、東大紛争等、数々の困難を乗り越えて今日に至ります。

この間、和道流を礎とした技術・技の研究、防具組手の開発、そして昨今の空手隆盛の基盤となった試合制度の創出、他大学への技術援助と全国的な空手団体の組織化、さらに国内外の空手部や道場の設立等を牽引。また、試合制度確立後は幾多の傑出した選手を輩出し、優れた戦績を残してきました。

近年では全国国公立大学戦（団体組手）での男子優勝 6 回、女子優勝 1 回、七大戦（団体組手）での男子 6 年連続優勝、女子 4 年連続優勝を達成。さらに、学連の主要大会（団体組手）でのベスト 8 進出、和道会世界大会（個人組手）での優勝を果たしました。卒業後も仕事に励みながら空手を嗜み、和道会の錬士七段を取得、あるいは和道会全国大会（団体組手）で優勝した拳法会員もいます。

我々はこの 100 年の歴史に誇りを持っています。その一方で、活動方針の一貫性、部員数の維持、東京大学拳法会の人的資源と資金力、和道流空手の技術・技の修得や伝承方法等について解決すべき多くの課題も認識しています。

Value（価値観）

これまでの 100 年の歴史の中で我々が大切にしてきたことは、

・強い相手でもたゆまず工夫をして最後は勝つという姿勢
・強さだけでなく品格も重んじるという武道に取り組む心構え
・文武の学びを通じて高みを目指し、世の中に貢献するという目的意識
・目標達成の喜びを仲間と分かち合う部活動の志向
・七徳堂で汗を流した共通の体験を持つ同期や先輩・後輩との程よい絆
・多様な個人を尊重するという基本的な態度
・生涯に亘り技の深みを楽しむ探究心
・前例に捉われることなく考え、年次に縛られず意見を述べ、最後は
　まとまる組織運営の知恵と意思

であり、このような共通の価値観を踏まえて社会で活躍する仲間達の存在が、我々の財産です。

Vision（ありたい姿）

我々はこれからの 100 年も、以上の価値観を受け継ぎながら、時代の要請や変化に柔軟に対応していきたいと考えています。開かれた道場に集い、溢れる若者達が、国内外の仲間と切磋琢磨し、空手の面白さ・価値を体現すること。卒業後に拳法会員となっては空手部員を支援し、自らも空手を楽しむこと。そして、ご支援いただいた多くの方々への感謝と敬愛を胸に、空手界のみならず世の中の発展の一助になることを願います。

Mission（使命）

我々の原点は、空手に真摯に取り組むことです。空手部員が「よしやろう」、苦しいときには「なにくそ」、拳法会員が「それならもっと応援しよう」と思える、我々の心の底から響く言葉は「文武両道」でした。我々はその更なる高みを目指して、「それぞれの文武両道の最高峰に挑み続ける」ことを東京大学運動会空手部の使命とします。東京大学拳法会はこの使命を共有し、空手部と一体になってありたい姿を追求していくことを宣言します。

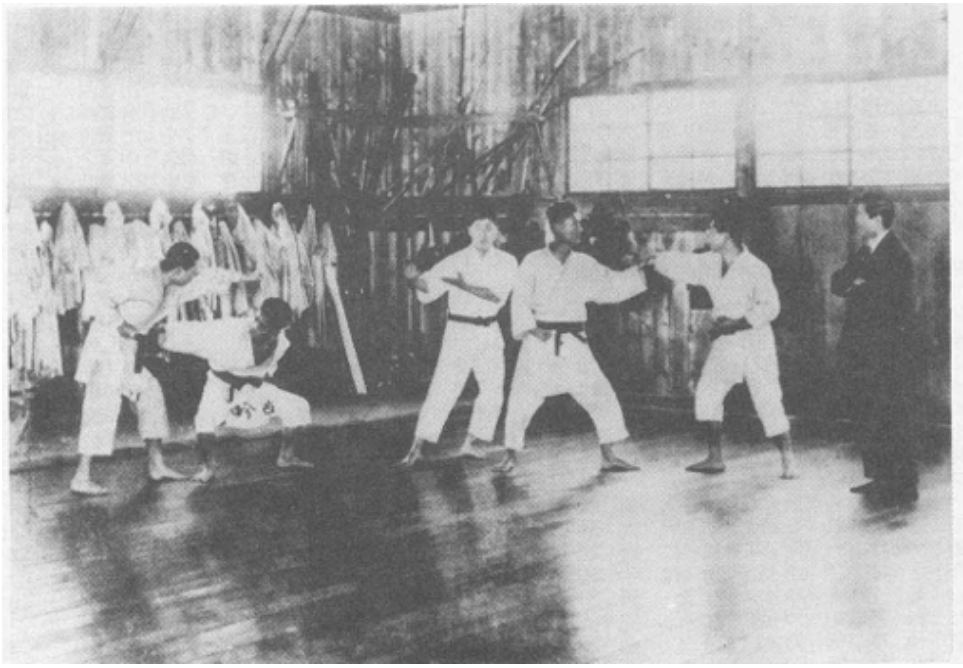
以　上

東大空手部の創立と黎明期

東京帝国大学唐手研究会の発足

大正 15 年 11 月頃、本郷・山上御殿前にて（前から 2 列目、左から 6 人目が船越義珍先生）　拳法会報 60 周年記念号より

大正 14 年（1925 年）10 月に、有志 3 名（桧物一三、名加地（仲地）腰、松田勝一）が中心となり「東京帝国大学唐手研究会」が発足し、新入会員を募った。当時、桧物・松田は、沖縄唐手を本土に紹介した船越（「富名腰」と表記されることもある）義珍先生に師事していた。船越先生が、彼らが大学で稽古ができるようにと大学での活動を勧めたのが研究会発足のきっかけだった。最初の練習には 20 数名が参加したという。初代会長は高橋良之助工学部助教授、初代師範は船越先生だった。



大正 15 年の練習風景（本郷・山上御殿下の旧道場にて）拳法会報 60 周年記念号より

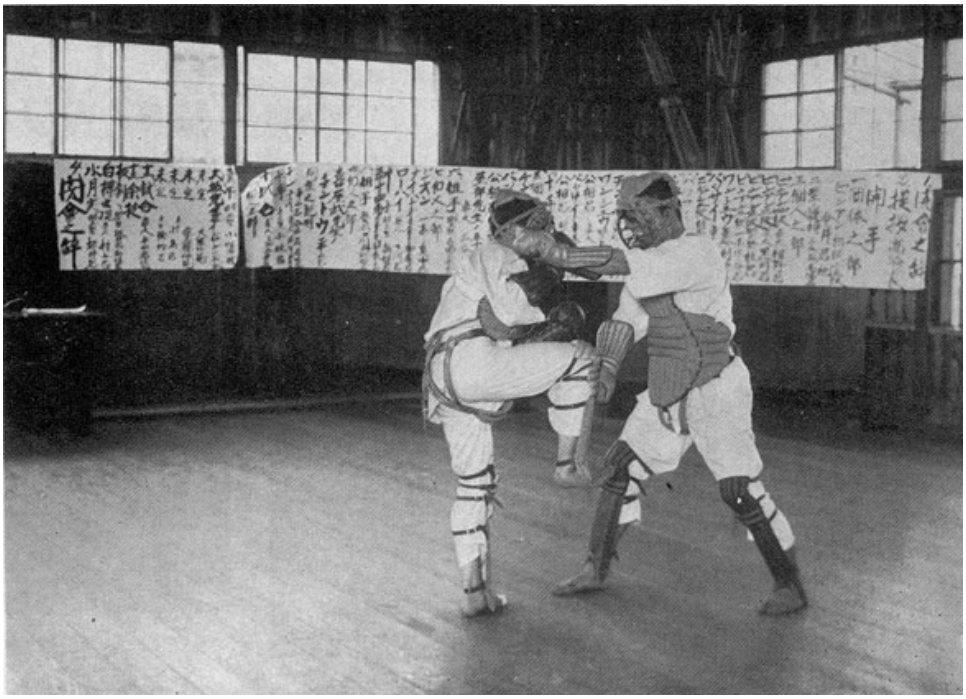
設立当初、創設者の桧物、松田、第 1 期生の大嶋仁（初代拳法会会長）など医学部学生が中心的な役割を果たし、また、医学部関係者の協力が会の設立と発展に大いに役立った。この医学部の存在の大きさ故、近年まで東大空手部と並び医学部生だけが所属する「鉄門空手部」が存在した。

当時、唐手は非常に珍しかった。東大唐手研究会は、大正 13 年創部の慶応大学に次いで、大学空手として先駆け的な存在であった。なお、「唐手」は後に「空手」表記の方が定着したことから、東大唐手研究会は、昭和 11 年（1936 年）に「東大空手研究会」に改められた。

また、上記写真を見ると当時既に組手練習を始めていたことが分かる。大学空手部としては東大が最初だったと言われる。

東大式防具の開発

下記写真の「防具」は東大独自のもので、衝撃力強化と危険防衛とを両立させるために考案された。最初は剣道部から稽古用具足を借りたものを使ったが不十分だったため、工学部や医学部の学生も含めた部員有志が知恵を絞って独特の乱取稽古用の防具を作った。危険防止と俊敏な動きの両方を満足するような機能を兼ね備えたとはいえず、課題を残したが、今日の空手のスポーツ化に貢献する要素を含んだ取り組みだったといえるだろう。



昭和 5 年 5 月 10 日、東大道場で春季唐手演武会を開く
このとき、［東大式防具］着用による試合が行われた
出典：三木二三郎・高田瑞穂著『拳法概説』
（Wikimedia Commons「File: Todai kumite.jpg」）

船越義珍先生と大塚博紀先生

活動開始当初、船越先生は週 2 回指導に来られていたが、翌年からは 3 回、隔日で来ていただくようになった。後に和道流を興し東大師範となった大塚博紀先生も、当時は船越先生の弟子として指導に来られていた。昭和 3 年(1928 年)には、宮城（皇居）内の皇宮警察道場「済寧館」において、船越・大塚先生に引き連れられた東大唐手研究会の面々も演武を行った。船越先生が演じられたのはクーシャンクー、大塚先生はナイハンチ初段であった。

船越先生は「形稽古の重視」を掲げ、「形を十分に練習すれば強くなる」と自由組手（フリー）の練習には否定的だった。一方、大塚先生は自由組手の導入に積極的だった。学生は形だけでは物足りず、勝手に自由組手や防具を着用した打ち合い稽古を行った。昭和 4 年、最終的に船越先生は師範を辞し、大塚先生も東大には来られなくなってしまった。それからしばらく先輩たちによる指導が続いたが、「先輩の指導だけでは唯我独尊に陥り、他大学との連携が取れない」との理由から、昭和 11 年に東大側から正式に依頼をして、当時既に船越先生から独立していた大塚先生を新たな師範に迎え入れた。「空手の普及が目的であり、謝礼は可能な範囲でよい」と語った大塚先生の姿勢に部員達は深く感動した。

以後、東大空手部は大塚先生の流派「和道流」を学び、伝え続けている。

大塚先生による自由組手の解説

いずれも拳法会報 60 周年記念号より

大塚先生の形解説（クーシャンクー）

七徳堂と戦中・戦後の稽古環境

唐手研究会の発足当初は本郷の山上御殿下、現在の山上会館付近にあったバラック建ての道場で稽古をしていた。現道場の「七徳堂」は、昭和 13 年（1938 年）に建てられたが、建造当初は空手研究会の使用が認められなかった。山本縫之助（後に初代空手部長）等が奔走し、昭和 14 年の 4 月に使用を公認された。山本の交渉で、翌年 9 月には七徳堂に部室が新設された。昭和 16 年 4 月には念願だった運動会の公認を得て、「全学会鍛錬部総務部空手部」（いわゆる東大空手部）となった。

同年 12 月太平洋戦争が勃発すると、繰り上げ卒業や学徒動員で練習が困難になったが、戦場でも生き抜けるように実戦的な空手を重視する傾向が強くなった。昭和 19 年頃の日誌には、「突き蹴りを止めたりする稽古ではいい加減なものになる。戦争中らしく思い切り強く突いたり蹴ったりしよう」とある。道場外で靴を履いて殴り合う「野試合」に近い練習が行われた。

昭和 16 年 10 月学内演武会（前列着座左から 4 番目が大塚先生）

拳法会報 60 周年記念号より

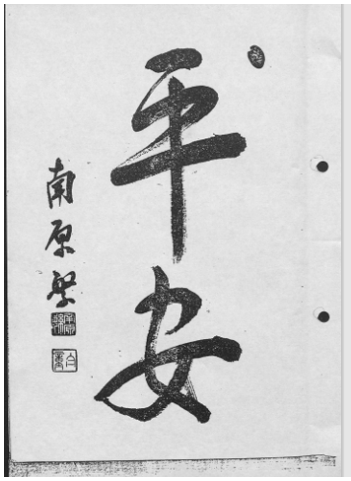
戦後、GHQ は武道を禁止した（昭和 20 年禁止通達）。そのため武道系の部活動ができなくなったが、空手は翌 21 年 4 月に禁止を解除された。（『早稲田大学百年史　体育会の復活』によると、当時早稲田大学法学部の大濱信泉教授が、GHQ と文部省に対し、空手を東洋一帯の文明圏から生まれた「オリエンタル・ボクシング」と称し、武道ではなくボクシングと軌を一にしたスポーツなのであると説得して、禁止の対象から外した。）

東大空手部は学生課の要望で「拳闘部（拳斗部）」と名称を変えたが、昭和 22 年（1947 年）に部活動を再開した（「運動会空手部」としての公認は昭和 26 年）。部の再建に尽力したのは、戦中最後のキャプテン横田強（昭和 17 年入部）と加藤重治（同年入部）、復学した太田義人（昭和 18 年入部）等だった。因みに柔道部は昭和 26 年、剣道部は 28 年に再開した。両武道部が活動できない間、武道場としての七徳堂は空手部によって守られたともいえよう。

昭和 24 年に、学制改革で駒場の旧制一高が東京大学教養学部として東大に統合されると、すぐに駒場空手部を創設した。

拳法会の設立と名称の背景

戦後の極端な生活困窮の時代、空手部の再建、及び部の維持、発展は先輩たちの財政的・技術的支援に依るところが大きく、後援会組織の結成が急がれた。そこで昭和 23 年（1948 年）、太田らの呼びかけで、空手部卒業生の会である「東京大学拳法会」が設立された。命名にあたっては、大塚先生が沖縄空手に日本柔術や剣術などの要素を組み合わせて和道流を作られたことを反映して、自分たちが行っているのは「沖縄から来た空手（そのもの）ではない」「東大型拳法だ」という考えがあったようだ。初代会長には第 1 期生の大嶋仁が就任した。



拳法会報・戦後復刊第一号（昭和 27 年）に掲載された南原繁・東大総長の揮毫

全国組織の結成と試合制度の確立

学連・全空連の結成

大学間の連携の動きは戦前にも見られた。東大が主導した「関東学生空手道連盟」設立（昭和 14 年）がその一つである。ただ、この組織の実態は関東の和道流大学の集合であった。

昭和 15 年初頭　関東学生空手道連盟発令式　最前列中央（背広姿）が大塚博紀先生
拳法会報 60 周年記念号より

戦後、昭和 25 年（1950 年）には、松濤館流と和道流に属する大学が中心となって「学生空手連盟」（学連）が設立された（後に「全日本学生空手道連盟」に発展）。東大、拓大、明大、慶大、早大、日大、農大、立教、中央、法政、専修、東洋等の各大学主将が集まり議論した。そのイニチアシブをとったのは、拓殖大学（松濤館）の西山英俊氏と東大の小嶋哲也（昭和 23 年入部）の二人だったという。同年 12 月には連盟結成記念演武会が挙行された。ただし、まだ関東中心の不十分な組織であった。

各大学の空手部が充実期に入った昭和 20 年代末期から試合制度創設の動きが出てくると、制度を普及させるために学連は全国的な組織になる必要が出てきた。関東と関西で手を結ぼうという学連からの提案に、当時関西空手界の大立者だった立命館大 OB の木崎友晴氏が呼応し、木崎氏の呼びかけで関西諸大学の学連加入が進んだ。そして歴史的な第一回全日本学生空手道選手権大会が、昭和 32 年（1957 年）11 月、両国の旧国技館で挙行された。優勝は明治大学であった。

昭和 36 年頃、空手部員が刺される等、空手絡みの暴力事件が相次ぎ、社会問題となったため、空手は社会からバッシングを受けた。これに対し、東大空手部 OB で衆議院議員の坊秀男（昭和 2 年入部。厚生大臣、大蔵大臣を歴任）は、文部省に対して、空手の組織を整備し、その活動を把握・管理すべき旨を申し入れた。坊はまた、学連を後押しするために国会議員の空手連盟（現在の「空手道推進議員連盟」）を作った。文部省は坊の申し入れを受け、大学における運動部の実態調査を行った。更に、空手界を含む学識経験者を集めて、大学空手部の運営に関する協議会を設立した。

2 年ほどの協議の結果出された勧告に基づき、「全日本学生空手道連盟」は、昭和 37 年（1962 年）5 月に改組・再編成され、早稲田大学総長の大濱信泉氏が会長に就任した。その動きに刺激され、東京オリンピック開催を控えた昭和 39 年（1964 年）5 月には、全国の主要な空手団体を網羅した「全日本空手道連盟」（全空連）が設立された。大濱信泉氏や慶応の小幡功氏ら学連の幹部が、この新組織の役員や事務局にも就任した。東大空手部 OB からは石塚彰（昭和 25 年入部）が事務局次長に就いた。

全空連はその後、各都道府県の空手道連盟（県連）を作るなど、空手団体の組織化を進め、オリンピック競技に繋がるスポーツ組織として今日に至っている。

試合制度の導入

試合制度が発足したのは昭和 32 年（1957 年）、前述の学生空手連盟が関東・関西で集まって第 1 回全日本学生空手道選手権大会を開催したときだった。

試合制度導入前の組手は、乱暴で凄惨なものが多かった。道場破り的に他大学を荒らして回る大学もあった。東大では流派の技の違いを説明して帰したが、真向勝負に応じ、怪我人が多く出た学校もあった。そこで、これではいけないと、試合制度の整備が話し合われることになった。

当初は、少々当たってもやむを得ないという雰囲気の中で議論が始まった。しかし、有効な技とは何か、反則とする行為の特定など、さまざまな角度から活発な議論が行われた結果、スポーツとして普及させることを重視して、当てることは禁止するという大方針が決定された。これを前提としてさらに議論が重ねられ、ルールが整備されていった。

このルールに基づき、先述の第一回大会が催された。その開催のために東大も運営にかかわった。糸東流や一部の大学の不参加はあったが、全国規模での初の組手試合の開催であった。

試合制度とそのルールの創設は、問題点を内包しながらも、それなくして、空手の現在の発展はなかったのではなかろうか。

試合制度開始当時の試合風景
（昭和 33 年 第 1 回関東学生空手選手権大会）
拳法会報 80 周年記念号より

東大空手部・拳法会の活動

他大学への普及　官公庁・海外への展開

空手は大学を中心に発展して組織化が進み、広く普及した。戦後、大塚先生は、全国の大学を訪ねて和道流の空手を指導した。東大空手部員や OB はそれに同行し、先生の指導を支援した。

昭和 28 年第 1 回九大遠征
九大寮にて休憩中の大塚先生（写真中央）
と東大空手部員
拳法会報 60 周年記念号より

北海道・東北では北大、東北大、山形大へ、中部・関西方面では京大、岐阜大、名大、名城大へ、九州方面では九大に行った。東京では、東京農大、東海大、立教、東京医大、外語大、水産大、成蹊大等で指導を行った。

伊達興治（昭和 36 年入部）と渡邉泉郎（昭和 38 年入部）は警察庁に入庁し、昭和 46 年（1971 年）に警視庁内に「空手倶楽部」を創設した。その後も出向先の県警で空手部を作ることに努め、平成 7 年（1995 年）には「全国警察空手道連盟」を結成し、第一回全国警察空手道選手権大会を開催した。伊達はその初代会長、渡邉は第 2 代会長を務めた。

農林省に入省した芝田博（昭和 28 年入部）は、霞ヶ関の官庁に勤める有志による「霞ヶ関空手倶楽部」を昭和 33 年（1958 年）に組織し、大塚先生直伝の技と精神を教えた。

その他、空手部 OB の普及活動としては、旧共立薬科大学の空手部創設、NHK 文化センター光が丘こども空手教室の創設・運営などがある。

一方世界に目を向けると、今や空手人口は 1 億人以上とも言われている。この空手の国際化は沖縄県民をはじめ流派を超えた多くの先人の努力の賜物と言えるのだが、東大では昭和 35 年入部の大上真吾が、ヨーロッパを中心に空手の普及に尽力した。

大上真吾がスウェーデンに設立した「サムライ道場」の標章

大上は 1969 年にスウェーデンのイェーテボリに道場を構えると、スウェーデン国内は勿論、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、イングランド、スコットランド、アイルランド、イタリア、ギリシャ、ウズベキスタン等に招かれて指導に赴いた。

大塚先生（左）と若き日の大上真吾（中央）

大上は、日本の空手（和道流）の技と精神を伝え、各地域で多くの空手愛好家を育成し続けた。スウェーデン他での空手活動は、2019 年の大上の没後も、教え子たちによって衰える事なく継続している。

「和道会」としての活動

大塚先生は、松濤館流から独立して昭和 9 年（1934 年）に「大日本空手振興倶楽部」を興した。その後、同団体は幾度かの名称変更を経て、昭和 42 年（1967 年）に「全日本空手道連盟和道会」（和道会）となった。

東大空手部および東大拳法会も、その支部として加盟している。現顧問兼技術相談役である石塚彰他、多くの先輩が加盟校の拡大や組織運営に関わり、さらには和道流の技術伝承と指導を通じて、空手の普及に長年貢献してきた。坊秀男、江里口栄一（昭和 11 年入部）、龍野順久（昭和 28 年入部）は会長を務

め、現在も副会長の柴山昌彦（昭和 59 年入部。元文部科学大臣）をはじめ、東大出身者が理事などの要職に就いている。

大塚先生退任後の指導体制

大塚博紀先生は、40 有余年にわたって東大空手部の師範として和道流を指導して下さったが、昭和 55 年（1980 年）12 月に東大師範を退任され、昭和 57 年 1 月に 89 歳で亡くなられた。

東大空手部は大塚師範の退任後、次の師範を擁立することはせず、OB・OG の技術指導委員会が現役部員を育成する集団指導体制を敷くことにした。それが現在まで続いている。

また、東大空手部・拳法会は、大塚師範の在任時から和道流技術の記録・研究・継承に取り組み、その一環として教本の制作などを行ってきた。その活動は、先生の退任後も技術指導委員会を中心にして継続し、教本や映像の形で更新している。

西村洋輝（2005 年入部・写真中央）は、2008 年和道会世界大会・個人組手－60kg 級で優勝　卒業後も選手・技術指導員として活躍

これからを担う若者

現役部員（最後列・左端が萩原凜太郎女子監督　2025 年 9 月 27 日七徳堂にて）

広川全大男子監督

4 年男子主将

4 年女子主将

第 46 回全国国公立大学空手道選手権大会

（2025 年 11 月 9 日 東大御殿下体育館にて）

男子団体組手の部で優勝

安田講堂も空手部創立と同じ 1925 年に竣工、今年 100 周年を迎えた。

＜参考資料＞　拳法会報より抜粋

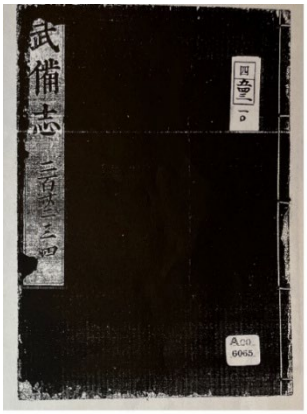
空手の淵源

「空手」（唐手）は、一般的な理解としては、中国の拳法が琉球（沖縄）に伝わって琉球の伝統武術と融合し、それから日本本土に伝わったとされる。中国で拳法について初めて書かれたのは、明代に編纂された武術百科である『武備志』とその種本と思われる『紀効新書』である。

中国拳法は、南北朝時代に禅宗の開祖である達磨大師が少林寺で始めたという説がある。その根拠として、達磨大師が、「易筋教」と「洗髄経」という書物に身体の構造や鍛え方、健康法を記したことが挙げられる。しかし「易筋教」、「洗髄経」は現存しておらず、そもそも後世の人の偽作らしい。よって達磨大師流祖説には疑問符が付く。

『武備志』は、明の軍学者の茅元儀によって 1621 年に編纂された大著であり、そこには「拳」の項目が収録されている。「拳」項には、32 の「勢」（日本でいう「形」のようなもの）の絵にそれぞれ漢字 30 字程度の説明がついている。この「拳」項の内容は、多くが『紀効新書』（1560 年初版）を典拠としている。著者の戚継光は、明の将軍として倭寇と戦い武功を挙げた人物で、拳法の実践者であったとも推察される。

『武備志』で紹介されている「勢」のひとつ「探馬」には、太祖（960 年に宋を興した趙匡胤）から伝わった技と記されている。



『武備志』より（「探馬伝自太祖」の文言が見える）

おそらく、宋の太祖のころには拳法のようなものが存在し、それが明代から清代にかけて体系化されたものと考えられる。

日本本土への伝来と四大流派について

日本本土への伝来

明清代に体系化された拳法の知識や技術は、18 世紀までには沖縄へ伝来したと考えられる。その根拠の一つに、『大島筆記』（1762 年）が挙げられる。

『大島筆記』は、戸部良熙という人物が、土佐藩の大島に漂着した琉球人から聞き取った話をまとめたもの。その中に、中国の「公相君」という人が琉球に渡り、中国拳法を披露したことが記されている。「公相君」とは称美の号（尊称）であり、本名は不明だが、彼が手と足を動かして技を出し大力の者を一瞬で倒したという。

大正 11 年（1922 年）、東京で文部省主催の第一回運動体育展覧会が開催され、船越義珍先生が、沖縄武術として「唐手」を紹介した。その後、講道館で行った演武に嘉納治五郎氏が感銘を受け、「本土でも教えてあげてください」と言ったとされる。船越先生はこれを受けて東京で唐手（空手）の指導を始めることとなり、本土で空手を教えた最初の人とされている。

四大流派について

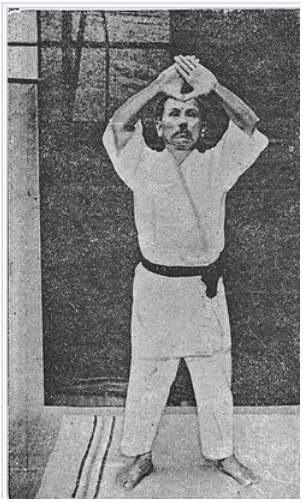
現在、空手（伝統空手）の「四大流派」として知られるのは、一般に「松濤館流」「糸東流」「剛柔流」「和道流」である。

大学空手部として最も古いのは、松濤館流の慶應義塾大学で、大正 13 年（1924 年）に活動を開始。その後、松濤館流は拓殖大学（昭和 5 年）、早稲田大学（昭和 6 年）、法政大学（昭和 9 年）、中央大学（昭和 15 年）へと拡大した。

和道流は東京大学（大正 14 年）を皮切りに、明治大学、東京農業大学、立教大学（昭和 10 年）などに広がった。東京六大学では、松濤館流と和道流がそれぞれ三校ずつを占めた。

松濤館流は船越義珍先生、糸東流は摩文仁賢和先生、剛柔流は宮城長順先生、和道流は大塚博紀先生が創始したとされ、それぞれが流祖と呼ばれている。

松濤館流の名前は、船越先生が東京の雑司ヶ谷に開いた道場に由来する。松濤とは、船越先生の雅号である。なお、船越先生自身は、空手に流派はないとして生涯流派名を名乗らなかったと言われる。松濤館流から派生した「日本空手協会」は、単独の会派団体としては世界最大規模の空手団体である。



観空（公相君）を演武する船越義珍先生

（出典：船越義珍著『錬胆護身唐手術』
Wikimedia Commons「File: Funakoshi Gichin2.jpg」）

糸東流の名称は、流祖・摩文仁賢和先生が二人の師、糸洲安恒先生と東恩納寛量先生の名から取ったもの。糸洲の系統はピンアンに代表される敏捷性を重視する流れ、東恩納の系統は呼吸法に象徴される筋力重視の流れである。その後、糸東流は一部を除き、混乱と分散が続いたが、これを受けて発足した「日本空手道連合会」に複数の流派が専門家として参加し、全空連の中核を成す組織となっている。

剛柔流の名称は、『武備志』の記述「法は剛柔を呑吐す」にちなみ、宮城長順先生が命名した。本土では昭和 10 年に立命館大学へ伝わり発展を遂げた。卒業後も稽古を続ける門下生が多く、規模は小さくとも強固な流派である。

和道流は松濤館流から独立した。神道楊心流柔術の免許皆伝を得ていた大塚博紀先生（明治 26 年生、茨城県出身）が船越先生に師事しつつ、空手に柔術や剣術の動き・感覚を融合させて創始した。大塚先生は、四大流派の中で唯一、本土出身の流祖である。

「和道」という名称は、大塚先生が大日本武徳会（戦前の日本において、武道の振興、教育、顕彰を目的として活動していた財団法人）へ届け出をする際、「和の道」すなわち日本的空手の道として名付けられた。東大 OB も命名に関わったと言われる。

大塚先生が創設した「大日本空手振興倶楽部」（昭和 9 年）は、昭和 42 年（1967 年）に「全日本空手道連盟和道会」（和道会）と名称を変更した。

その一方で、大塚先生は、昭和 56 年（1981 年）に、和道会と袂を分かって「和道流空手道連盟」を興した。現在は、この 2 つの団体が和道流の主な組織として活動している。

大塚博紀先生が昭和 31 年初春に寄せた揮毫　拳法会報 30 周年記念号より

七徳堂（撮影：岩倉 具輝）

東京都選定歴史的建造物。純日本式御殿造りの型を誇る武道場。本郷御殿下グラウンドの南に位置する高台にあり、屋根の反り、鬼瓦など天平風のもので、雄渾、剛健な気風を映している。「文武両道」を体現する場として建てられ、その名は古代中国『春秋左氏伝』に記された「武に七徳あり」に由来する。

武に七徳あり：暴を禁じ 兵を戢（おさ）め 大を保ち 功を定め 民を安んじ 衆を和し 財を豊かにす

（暴力を禁じ、争いを治め、国を保全し、人々の功績を正当に評価し、民の生活を安定させ、互いに良好な関係を築けるようにし、社会全体を豊かにする）

竣　工：昭和 13 年（1938 年）

設計者：内田祥三（東京帝国大学建築学科教授、後に第 14 代総長）

東京大学空手部　百年の歩み

発　行：東京大学運動会空手部創立 100 周年記念事業推進実行委員会

編　集：「東京大学空手部　百年の歩み」編集委員会

発行日：2025 年 12 月 6 日

※本誌は東京大学運動会空手部および東京大学拳法会による 100 周年記念出版物であり、東京大学当局の公式見解を示すものではありません。